

ずいそう



肩の力を抜いて グローバルゼーション！

齋藤 哲司

「21世紀はグローバルゼーション」最近よく耳にする言葉である。

天候にも左右されず、昼夜もお構いなく、世界中を情報が飛び交うのを目の当たりにして、益々、グローバルゼーションなるものを実感する機会が多くなってきた。情報伝達の高速化・広域化がその手段として、重要な役目を果たしていることは、間違い無い。

しかし、である。相手が人なら、こちらも人。人と人とのグローバル化にはどう向き合うべきか？ 行き着いた所は「相互の多様性にどう向き合うか」と言うことで落ち着き、海外勤務で得たネタを交えて軽いタッチで文を綴ってみた。

農耕民族のDNAを色濃く引きずってきた我々日本人には“同一性”の環境は安堵感を持つ居心地の良い空間である。「交叉点、皆で渡れば怖くない」とか、「周囲の様子を見る」・・・等など。

兎に角、「皆と同じ。皆といっしょ。」がキーワードである。別の言い方では「皆と同じ物を持つ」とか「皆と同じことをする」のが我々日本人の思考と行動の原点とも言える標準仕様ではと感じてきた。もっとも近年ではそのDNAも次第に変化していると聞かぬが……。

さて、農耕民族のDNAを引き継ぐ私に欧州現地法人へ勤務の機会が訪れたのは、今から5年半ほど前の秋の頃であった。勤務地はベルギー国境に近いオランダの田舎町である。オランダと言えば高速道路を2時間も走れば、国境を越えるか、あるいは北海に行きつくと言う九州ほどの面積を持つ小国である。

そこで出会った話題であるが、毎年、新年早々に弊社製品を扱うオランダ国内のディーラーが一堂するミーティングが執り行われる。酒が入ればお国自慢は自然の流れである。更に、議論好きの国民性が顔を出す。

今回はオランダ語の話で会話に花が咲いた。オランダ北部フリースランド出身者によれば「南の奴らには俺のオランダ語はその30%も理解できない。ワハハー」と自信たっぷりの言い方。まるでオランダ語でありながら、オランダ人には通じないことに誇りを持っているかのよう。

そばにいた私には、何がどうなのか理解できぬままに会話が進み、南の人も片目をつぶりながら「そーだ、そーだ、お前らの言集はサッパリ判らん」と言うから言葉が通じないのは事実なのであろう。綴りは同じではあるが、発音が相当な違いがあるようである。こんな小さな国



の中でもここまで違いがあることに正直大きな驚きであった。

オランダは大河の中洲にできた国であり、川が多い。そのため、極端に言えば川を越えれば発音が違い、また、宗教が違うと言われているらしいが、それらの個は個としての違いを意識しつつ、かたくなに個を守っている(?)から立派なものである。小さい区域で多様性が混在し、ごく当たり前のように、それ

らの多様性を寛容の精神で懐深く受け入れているのである。

日本人観光客が一番好きな、スイスも伊・仏・独語の世界である。私の家族と共に、2度ほどスイスへドライブ旅行を計画した。いざ車を出かけるとなると、いずれの言葉を理解しないため、交通標識、交通事故時の対応が心配であった。幸いにして、交通事故には遭わなかったが、その世界に入ると、心配ごとは消沈し、意外とスムーズに受け入れられるものである。

多様性は自然体で受けとめるのが一番であると気付くこと自体が多様性のなかで、仕事をし、生活を続けるポイントと実感した瞬間であった。

ここで、欧州における多様性の極めつけを小冊子からの引用で紹介したい。

駐在勤務をスタートした頃は、EU 統合に向け議論が盛りあがっていた時期である。ドルおよび円経済圏に見劣りしない EU 統一通貨や EU 域内の関税障壁排除などである。

同時に個性に富む EU 国人の性格を寄せ集めて、理想の EU 人を作ろうとの冗談めいた思惑も垣間見える。

寄せ集めて、つくる理想の EU 人とは「料理をすればイギリス人並の腕前で、常に素面でいるのはアイルランド人そっくり、謙虚なところはスペイン人だし、フィンランド人ほども多弁。ユーモアはドイツ人顔負けで、車の運転はフランス人のように上手。しかも機械をいじらせたらポルトガル人同様の腕前だし、忍耐力はオーストリア人にも匹敵し、自制心はイタリア人並みで、その上、支払いの段になればオランダ人のように太っ腹」(ウインドミル誌'86号)と皮肉たっぷりの見事な内容である。

グローバルゼーションに生きるにはこのような多様性(?)に肩の力を抜いて、柔軟に受け入れる姿勢が必要と実感するこの頃である。

赴任して間も無い頃、日本への出張からオランダへ戻る機中で隣り合わせた日本の大学教授と話が弾んだ。政府機関の外郭団体が主催する海外研修教育で春休みを利用して、オランダへ研修旅行する中高学生に随行しているとのことである。研修テーマは「国境」を体験させ、「多様性」を考えさせるのが目的とのことである。その時は研修先として、オランダを選択した理由を聞き損じたが……。

今考えると、研修先も然ることながら、グローバルゼーションの時代を支える若者に対する、なかなか先見性ある研修テーマである。